母なる自然のおっぱい

池澤夏樹

新潮文庫

母なる自然のおっぱい

新潮文庫　い－41－4

平成八年二月一日発行

著者　池澤夏樹

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六－五四四〇
読者係(〇三)三二六六－五一一一
振替　〇〇一四〇－五－八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・凸版印刷株式会社　製本・株式会社大進堂

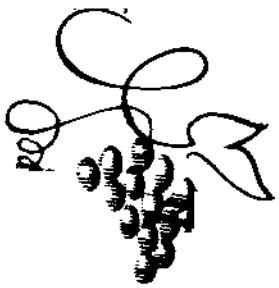
© Natsuki Ikezawa 1992　Printed in Japan

ISBN4-10-131814-X C0195

新潮文庫

母なる自然のおっぱい

池澤夏樹著



新潮社版

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I
ぼくらの中の動物たち……11
ホモ・サピエンスの当惑……31
狩猟民の心……51
II
ガラスの中の人間……69
III
旅の時間、冒険の時間……111
再び出発する者……131

Ⅳ
川について……163
風景について……182
地形について……200
再び川について……219
Ⅴ
いづれの山か天に近き……241
樹木論……271
あとがき……286
文庫版のあとがき……288

母なる自然のおっぱい

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ぼくらの中の動物たち

ある友人の話。

しばらく前、仙台の町にいる時にたまたま暇ができたので、動物園に行った。小雨のぱらつく日で、園内にはほとんど誰もいない。檻から檻へとぶらぶら見ながら、オランウータンの前まで来た。中を見ると、まだ幼さの残るオランウータンが一匹、リンゴを手に持っておいしそうに食べている。友人はなんといっても暇だったし、それにオランウータンは好きな動物だから、檻の前に立ってずっとそれを見ていた。やがて、相手は彼に気が付いて、ちらっとこちらを見たが、そのままリンゴを食べつづけた。その様子がかわいいので、彼はなおも見ていた。

しばらくして、オランウータンはまた彼の方を見てちょっと困ったような顔をした。手の中のリンゴを見、もう一度、檻の外の彼の顔を見た。そしておずおずとそばにやってくると、「きみも食べたいの？」と言わんばかりの顔でそのリンゴを彼の方に差し出した。一人だけ

で食べているのはよくないと思ったらしい。彼はもちろんリンゴが欲しくてオランウータンを見ていたわけではないから、この申し出を丁寧に謝絶し、相手はまた安心して一人でリンゴを食べつづけた。

この話はなかなか感動的である。食べるものを分かちあうというのは倫理的に高度な行動だし、人間でもそれができない者は少なくない。学者たちはゴリラやオランウータンの知力とチンパンジーのそれの間には差がないと言っている。知力だけでなく性格まで考えあわせれば、人間に一番近いのはオランウータンかもしれない。おまけに学説の上ではこのところ類人猿と人間の生物学的な距離は次第に近づきつつある。ゴリラによる子殺しや、チンパンジーが時として見せる攻撃性を否定する必要はない。それまで含めていよいよ彼らは人間に近いという皮肉な結論に至るだけである。

類人猿がかつて考えられていたよりも人に近いことを示す研究は少なくない。最も大きな差と考えられていた言語の能力にしても、発語のための解剖学的な機構が整っていないだけで、脳の方に簡単な言葉を操る力があることはほぼ確認され、実際アメリカではずいぶん前からチンパンジーに手話を教える実験が行われて、なかなかの成功を収めている。日本ではパソコンにピクトグラム（パソコン用語で言えばアイコン、日本人に最もわかりやすい言いかたをすれば創作漢字だ）を表示してキーを押させるという方法で、チンパンジーに複数の単語を組み合わせた文を作らせる試みが進行中。チンパンジーやオランウータンがワープロ

で作文をする姿がいずれは見られるかもしれない。

ぼくはリンゴを二つ食べる
ぼくはバナナを三つ食べる
ぼくは満足
雨が降る

というような詩をオランウータンが書いたとしても、また後になって自作の詩を読んでそれを書いた時の満足感を思い出したとしても、何の不思議もないではないか。冗談ではなく、本当にその日が来るかもしれないとぼくは思うのだ。

しかしながら、この論法そのものがもう人間の側の勝手な偏見の上に立ったものである。人間に近いと言われて相手が喜ぶとはかぎらない。おだてられて喜ぶにはその評価の基準を両者が共有しなければならないが、サルたちは本当に人間などに伍したがるだろうか。人間の知力の尺度を類人猿に当てはめた上でどこまでサルは人間かという設問の出しかたは、たとえばオランウータンの遺伝子の九八パーセントまでが人間と同じであるというような科学的に凝った言い回しで擬装したにせよ、人間の定義という砦の中に閉じこもった上で外の類人猿に余ったピーナッツを投げてやる以上の意味を持たないだろう。その手の論議に今われわ

れが熱をあげる背景には、種としてのホモ・サピエンスの淋しさとでも呼ぶべき感情があるのではないだろうか。人間ほど他の動物から遠く離れて孤立してしまった種はないのだ。もう一歩踏み込んで、このような姿勢の背後には、自分たちだけが異常な速度で進化してしまったことへの不安があるのだと認めるべきかもしれない。

生物はみな自分の肉体的な条件の許す範囲で生きている。一つの種の肉体は進化の法則に従ってごくゆっくりとしか変わらないから、ある動物の生きかたが変わるには百万年単位の長い時間がかかる。だが、十万年ほど前、われわれホモ・サピエンスは、肉体的な条件を無視して知性で表面だけを変えるという便法に走った。その結果、足の筋力も心肺機能も改善することなく時速百五十キロで走るようになったし、翼を生やすことなく、つまり数百万年分の進化をごまかして、空を飛ぶようにもなった。今のわれわれのありようを支えているのは生物学にのっとった本来の進化の結果ではなく、知力という強力な加速装置を使った、いわばバイパス経由の進化、遺伝子の裏付けのないインフレーション的な進化なのである。われわれは自分の中に動物としての部分が残っていることを知りつつ、それとは異なる基準によって自分たちを認識し、行動している。知力ゆえに自分たちは類人猿以下の動物たちとは違う生き物、まったくかけはなれた存在だと信じている。そして、おそらくそのことを無意識のうちに不安に思っている。数千年にわたってサルを似非人間としてさんざ馬鹿にしてきたあげく、不安を解消するには事態を客観視するほかないとようやく気付いて、チンパンジ

ーの知力を測定しようとしている。

振り返ってみれば、ことがここまで進んだのはそう遠い昔ではない。一万年ではなくこの百年、この三十年、われわれの世代が問題なのだ。ついしばらく前までは人はまだ自分を動物界の一員とみなし、さまざまな形で動物たちとコミュニケーションをはかりながら生きてきた。それが遠い昔に思えるのは、たぶん知力による進化が最近になっていよいよ加速されたからだろう。今、われわれが知力の熱気球で上昇しながら緑の平原を見下ろすと、そこでは動物たちが昔と同じように調和を保って生きている。ああいう生きかたもあったなと懐(なつか)しくは思うが、今となっては平原へ降りる手段はどこにもない。気球はどんどん昇ってゆく。われわれの中には隠しても隠しきれない高所恐怖症があって、それが熱気球に乗ったホモ・サピエンスの孤独感をつのらせている。今ほど人が安楽に暮らす一方で脅(おび)えてもいる時代はかつてなかったようにぼくには思われる。この矛盾はなかなか興味深いものだ。

かつて人間は今のように自分たちを動物界から遊離した特殊な生き物だとは思っていなかった。狩猟採集経済によって生計を維持する人々は知力を楯(たて)にとって驕(おご)りの砦にこもるようなことはしなかった。そんな態度では獲物は一匹も捕れない。狩ると狩られるの関係においては人と動物は同等である。動物たちと人間の間には決定的な違いはなかった。両者は互いを敬意の目で見て評価しあっていた。こういうことについては例を挙げるのが話が早い。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com